第８０回 長崎大学ＦＤ実施報告書

長崎大学 FD・SD（特別講演会「終末期を迎えた戦後日本の大学-再生への処方箋-」）

【趣　旨】本学経営協議会委員で日本学術振興会理事長・安西祐一郎氏の特別講演を行います。安西氏は、過去 20 年の大きな社会変動にもかかわらず、大学には十分な時代対応がなく若者の教育をないがしろにしてきたのではないかとの反省のもとに、喫緊の改革課題を整理して示される予定です。短時間ではありますが、この機会に本学を取り巻く社会状況をあらためて振り返り、大学が脱皮すべき方向について共に理解を深めたいと存じます。

【対　象】　全教職員

【日　時】　平成 24 年６月 25 日（月）16:15～17:15

【場　所】　長崎大学文教キャンパス中部講堂

【講　師】　安西祐一郎氏
（日本学術振興会理事長・文部科学省中央教育審議会大学分科会長等）

【内　容】
開会挨拶　片峰 茂学長
講演「終末期を迎えた戦後日本の大学-再生への処方箋-」　安西祐一郎氏
閉会挨拶　片峰 茂学長

【主　催】教務委員会

【企画・運営】評価・FD 教育改善専門部会

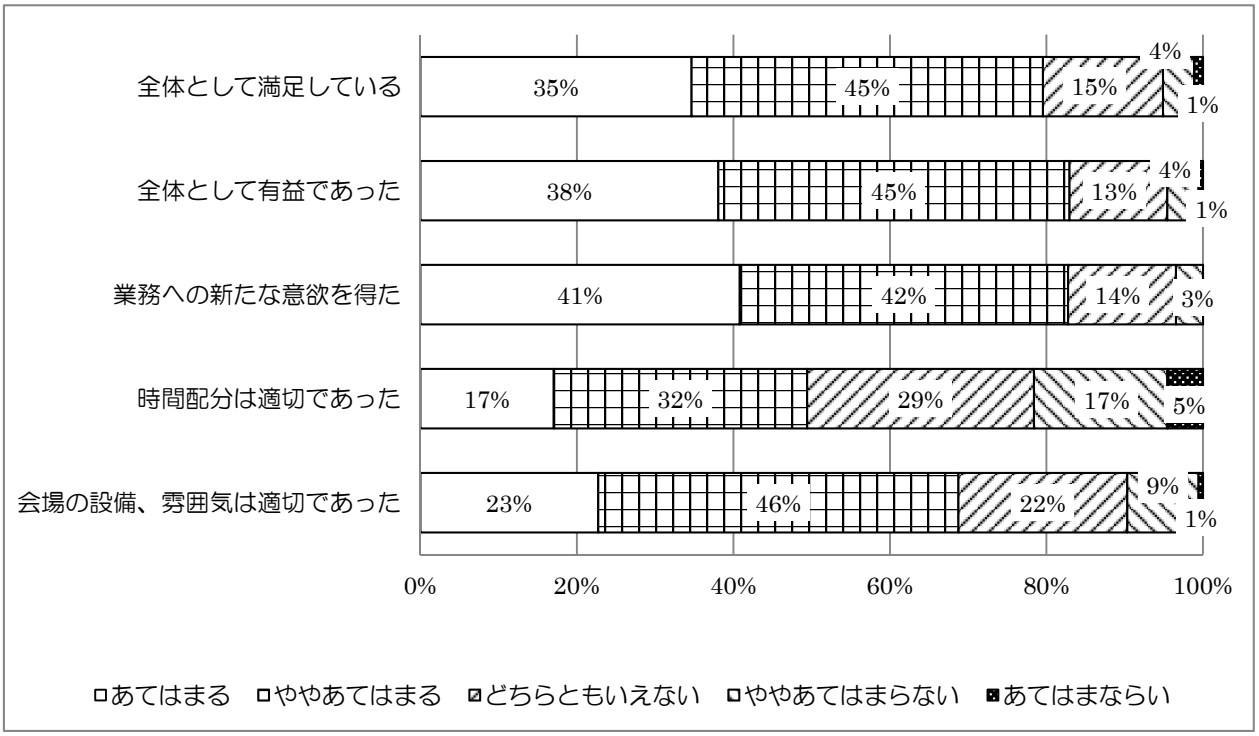
【参加者】
３０２名（受講証発行対象者２３６名（教員１４９名　事務職員８７名））

教育学部	12
経済学部	5
医歯薬学総合研究科（医系）	8
医歯薬学総合研究科（保系）	6
医歯薬学総合研究科（歯系）	6
医歯薬学総合研究科（薬系）	9
工学研究科	42
水産・環境科学総合研究科（環境）	15

水産・環境科学総合研究科（水産）	7
国際健康開発研究科	3
熱帯医学研究所	4
病院	7
先導生命科学研究支援センター	1
情報メディア基盤センター	6
留学生センター	3
アドミッションセンター	1
男女共同参画推進センター	1
言語教育研究センター	5
その他	8
事務職員	87
学生	17
学外者	49
計	302

※内数：学生１７名　学外者４９名（受講証発行対象外）

【参加者からの評価】



〇今日の大学改革について、疑問点や感想、ご意見などがありましたら、率直にご記入下さい。

- 文科省の意見か、安西先生の意見かよく分からなかった。現状は良く分かった。（工学研究科・准教授）
- 考え方や今後の方向性がしっかりした講演内容だったが、もう少し時間がほしかった。（工学研究科・准教授）（薬学部・教授）
- テーマを絞ってじっくりお聴きしたかった。（教育学部・准教授）
- 長崎大学の一般教員が自分の問題として行動を起こさないと、他から置いていかれる。（役員）
- 「研究」をやっている教員は非常に評価されるが、「教育」に関してはまったく評価されない。逆にダメ扱いされることがあるため、もっと変えてほしい。安西先生の言うとおりだと思う。（歯学部・助教）
- 今回のテーマについて、また話を聞きたい。（教授）
- 研究組織と教育組織を互いに特化するなどというように、系統的な科目の構築、単位交換など本当に必要な教育は何かを各学部、学科、コースで考えるべきである。（工学研究科・准教授）
- 大学の自治について考えさせられた。（医歯薬・教授）
- 大学改革についての理解を深める良い機会となった。良い意味での危機感を感じた。（教育学部・准教授）
- 日本の大学の問題を再認識した。（工学研究科・教授）
- とても参考になった。（教員）
- 大意は良いと思うが、もう少しお人柄が分かる話があればさらに良かった。（教育学部・教授）
- もう少し時間があれば良かったが変革を自らが行う大切さが伝わってきた。（教育学部・教授）
- 「大学改革」の必要性とコンセプトについての理解が深まる契機となったと思う。（情報メディア基盤センター・准教授）
- とくに長崎大学は大学と職学学校の違いを分かっていない。改革論者が多すぎる。（環境学部・教授）
- 長崎大学の学生は、自分を過小評価していることが多いと感じられ、いかに自信をつけさせるかがポイントになると思う。（工学研究科・助教）
- 特定分野として、なぜ工学、教員養成、医学が挙げられているのか詳細な裏話をお聞きしたかった。（工学研究科・教授）
- 問題提起はその通りだと思う。（核兵器廃絶研究センター・教授）
- 長崎大学着任以来 30 年、ずっと改革中で教育面では新カリ、旧カリが入り乱れて落ち着く暇がない。改革のレベルが小さかったのか何度も何度も改革させられて、良くなったのかどうか疑問である。少なくとも 10 年間は安定したカリキュラムを実施でき、次善の策を練る時間が必要と思う。社会も大学もバタバタしていていいのか。どっしりとした大学が社会を落ち着かせ、安定化させる役割を果たすことを望む。長崎大学は地域再生でいくのか世界と戦う大学でいくかなどは、教員個人の判断しかないか？（工学研究科・教授）

- 大学は出たけれど、教育力のアップが必要だと感じる。（教授）
- 先生を育てることから始める必要があるのではないか。（教員）
- 高校生は専門性を理解できない。受験で大学ではなく入りやすさを見ている。この意識を大学からどう変えられうるか疑問。（准教授）
- 改革は必要と以前から考えていた。自ら改革できないと判断されたことは、大いに問題あると思う。（工学研究科・准教授）
- 中途半端な内容でもの足りなくもったいなかった。質問を受けていただければ良かった。（教員）
- 個々の教員でどうしようもない。問題と出されてもしようがない。（教育学部・准教授）
- 分野基礎、専門基礎の教育（講義）内容の標準化が主張されていたが大いに疑問。講義が下手な教育を改造する方が先。論文の品質で日本が４位→7 位、中国が台頭に４位になどと間違ったデータを用いている。グローバルで critical thinking ができ、自立的に勉強する大学生像は大変結構だが、その前に徹底して基礎的実力をつけさせることがもっと大切。上すべり改革は negative.（工学研究科・准教授）
- 大学のビジョンとして、何を、どこを目指すのか大変勉強になった。（本部・事務職員）
- 大学連携は問題解決の契機になるか。各大学の特色が失われないか。（薬学部・事務職員）
- 教員の意識改革ができないと大学がこの先傾くと思った。（経済学部・事務職員）
- 大学改革＝教員と職員が世界標準に近づけること。（事務職員）
- 大学改革、部局改革にしても、担当者は業務が偏り、以前より格差が生じている。もう少し皆が参加するよう底上げが必要だと思う。（事務職員）
- 大変有意義で面白いお話だった。今後の大学は本当に大変だと感じた。（経理課・事務職員）
- 改革の基幹に、どのようにリンクを張れるのか、考える機会となった。（学生支援部・事務職員）
- これから先、どのように変わっていくかが正直分からない。しかし、変わる方向性が決まり、それに向かって進むというようになれば、教員、職員、学生皆が考えを一致させて改革していく必要があると思った。（工学研究科・事務職員）
- 教員、職員の意識改革が大前提である。大学改革は、簡単に進めないし、進まないであろう。大学執行部の考え方、ビジョンをもっと教職員へ伝える場（今回のような講演会でも、検討会でもよい）を設けるべきである。（環境科学部・事務職員）
- もっと具体的な計画・案等をお聞きしたかった。（事務職員）
- これまで問題とされていた事項が明確に示された感がある。組織システムに胡坐をかいていた教員に考えてもらいたい。「できない」ではなく、「どうすればできるのか」といった観点を持ってもらえればと思う。（研究国際部・事務職員）
- 学生に求められる能力は今日のお話を聞いても結局のところ、あまり昔と変わらないように感じた。その中で結果として身についていない現状をみれば今回の改革も意味をもつものになるのか疑問である。（工学研究科・事務職員）
- 大学ガバナンスの改革が重要である。改革のための法制化等が必要なのではないか。（長崎県立大学）

- とてもわかりやすい言葉を使って講義をしていただいた。日ごろから大学教育って何なのかを考えているが、私がやるべきことが何となくわかった。（長崎県立大学）
- 日本の進学率を韓国並みに引き上げる改革は必要ではないだろうか。改革内容に関してはとくに講演内容に同意する点が多かった。（長崎国際大学）
- これまで文章のみの説明であったが、今回ある程度具体的な内容が聞けたので良かった。（教務課・学外者）
- 大学改革の中心人物のお話であったので、非常に説得力のある興味深い講演であった。現在、大学の置かされている状況の厳しさを痛感した。ただ、欧米型の教育システムが日本にフィットするか、日本の独自性が打ち出せるのかが問題だ。（長崎国際大学）
- 大変有意義な内容だった。大学改革は「待ったなし」だ。（長崎国際大学）
- 大学としてのミッションー特徴を明確にすること、先手を打って決断してやること。これらを、メリハリをつけてやることの大切さが良く分かった。（長崎国際大学）
- もう少し民業的、自由競争的な思想でいいと感じた。「Ｈｏｗ　ｔｏ」では解決できない時期に来ているように思った。（長崎国際大学）
- 留学生のことについて、経済力の強い国へ留学生は行くという点はその通りだと思う。日本の中で長崎は留学生にとって魅力ある場か疑問であり、魅力的となるよう努力しなければならないと思った。（長崎短期大学）
- 大学改革が「自分で」成功するとは思えないので、外的な力が必要だと思う。（長崎県立大学）
- 大学改革については、とくに文科省をはじめ、外からの改革論が強く、大学内にあっては今一つ熱気が乏しいように思う。しかし、改革は待ったなし、教職員のコンセンサスは必要であるが、ある一定の理解をＳＤやＦＤで求めて最後は学長のガバナンスで実行しなければならない。但し私立大学はその改革が高校生や高校の先生方の評価に結び付き学生募集でプラスの方向に働くことが必要。地域の小規模大学は地方の過疎化、少子化、地域の景気低迷が直接かかわってくる。大学改革が大学の活性化につながる戦略をいつも考えている今日この頃である。（長崎国際大学）
- 大学改革が待ったなしのところまできているということ、それに対する安西先生のお考えがよくわかり、大変勉強になった。「グローバル人材」の育成の重要性についても触れられていたが、その場合の「グローバル人材」とはどのような人材像なのか、もう少し詳しく知りたかった。（長崎国際大学）
- 大学改革の問題は、やはり国公立と私立との置かれている状況によって異なっていると思われる。学士力の達成ということが言われているが、分野によっても、個々の大学の状況によっても、克服していくべき課題は多様である。ホモジーニアスな学生、研究者を前提にしても具体的展望は見えてこない。（長崎国際大学）
- 学生の立場からお聞きして、私たちのあり方も考えさせられた。（学生）
- 私はまだ入学して３カ月程しか経っていない１年生だが、個人的には「主体的」な授業を受けている気はしない。しかし主体的な学習とは授業ではなく自学あると思えた。（学生）
- 学生として勉強することが何よりも大事であることを学んだ。18-24 歳の一定期間をただ過ごす

場に大学をするのではなく、世界で通用する人材になるべく努力し、成長する場、期間となるようにしたい。（学生）

- 結局は、企業ですぐに戦える戦力がほしいということだろう。対応力法が単に標準化競争、自由原理を入れるという結論にがっかりする。出にくくなる大学であれば、それですぐ使える戦力であればそれでいいか。（学生）
- 国益のため、興味と志を持った人を育てるとした方が自力で生きる人間が育つのではないかと思う。むしろ、集団で相手と戦うか、ブロックを組むかを考えた方がいい。（学生）

〇今回の特別講演会の運営に関して、何か感想やご意見がありましたら、ご記入下さい。

- 短くて残念だったが、授業の合間ではこれが精一杯。いい時間だった。（教育学部・准教授）
- もう少し時間があれば良かった。（歯学部・助教）（情報メディア基盤センター・准教授）他８名
- 事前の受付確認ができるようにしていただきたい（メール等）。受付されているか不安である。（医歯薬・助教）
- 課題の再確認はできたものの新たな知見がなかったように思う。（工学研究科・准教授）
- もう少し各論（長大自体）がほしかった。（教育学部・教授）
- 内部で検討し、発表会（報告会）を開いてはいかがでしょうか。（教員）
- 大学改革の詳細はともあれ、問題意識はなんとなく分かったが、意識を持つには、これ以外の機会も必要だろう。（准教授）
- 短い時間で内容が広すぎる。（工学研究科・准教授）
- 質疑応答の時間が必要である。（研究推進戦略室・事務職員）他２名
- 引き続き大学改革のＦＤ・ＳＤを開催してほしい。（学術情報部・事務職員）
- 時間の割に伝えようとする中身が多すぎる。資料は付けずに「思い」を語っていただけた方が良かったのではないか？（研究国際部・事務職員）
- パネルディスカッションのような意見交換のできる時間があるとより良かった。（長崎国際大学）
- もっと長い方が良かった。安西先生の温度は感じられて良かった。（長崎国際大学）
- 本大学の教員全員に聞かせたい内容だった。（長崎国際大学）
- 時間が短く質疑応答で深めることができなかったが、有意義であった。（長崎国際大学）

【総　括】

１時間の中で、広範に亘る内容のそれぞれにふれていただいたという点で、「待ったなし」の大学改革の状況をあらためて認識する機会となったと思う。しかし参加者の多くは、時間不足であった、質疑応答があればよかった、より具体的な部分を知りたかった、といった感想をもっており、今日の大学改革の方向を自分たちの課題として咀嚼するには至らなかったことが残念である。この点が、とくに時間配分と会場の雰囲気に関する評定を下げた原因ではないかと思われる。ある教員が記したように、「もう少し時間があれば良かったが、変革を自らが行う大切さが伝わってきた」というのが簡単な総括といえよう。

長大としての具体的対応が迫られるなか、「内部で検討し、発表会（報告会）を開いてはいかがでしょうか」（教員）、「教員、職員の意識改革が大前提である。大学改革は、簡単に進めないし、進まないであろう。大学執行部の考え方、ビジョンをもっと教職員へ伝える場（今回のような講演会でも、検討会でもよい）を設けるべきである」（事務職員）、といった意見は貴重である。大学改革の論議は、そのままでは個々の教員や職員の問題として捉えにくい。具体的な日常活動がどう変わるべきなのか、一つのたたき台を示し、それを個々の部署でのアクションプランに反映させていくプロセスが必要ではないかと思われる。

今回、学生 17 名の参加があったが、彼らの間でもいろいろな考えがあるようである。自分の課題として受け止め、「学生として勉強することが何よりも大事であることを学んだ。18-24 歳の一定期間をただ過ごす場に大学をするのではなく、世界で通用する人材になるべく努力し、成長する場、期間となるようにしたい」と記した学生もいたのは心強い。学生たちがどのような考えをもち、長大にどのような不満や要望を抱いているのかをもっと聴いてみる必要があり、教職員との意見交換の過程で、学生たち自身もまた変革を迫られていること、主体的学習がさらに求められていることを理解してもらうことが必要ではないかと思う。